

## CONTENTS

第28回研究大会のご案内……………(1)	受贈図書(2022年10月～2023年4月)……………(6)
会告(会費納入・会員資格)……………(5)	会誌『東アジア近代史』論文投稿の募集……………(6)
新規入会者(2022年9月～2023年4月)……………(6)	

## 第28回研究大会のご案内

今年度の研究大会は、7月1・2日(土・日)に東京大学駒場キャンパス(18号館)にて対面とオンライン(Zoom)を併用して開催することになりました。今年度も対面とオンラインの併用で、事前登録になっております。参加希望の方は学会からの大会案内メールやホームページから登録してください。

今大会は自由論題報告を1日目と2日目の午前に、歴史資料セッション「戦争関連資料の収集・保存・公開-国民の共有すべき歴史的文化遗产をどう残すのか-」を1日目の午後に行い、大会シンポジウム「東アジア近代史における「ロシア」という存在」を2日目の午前より午後にかけて開催いたします。総会は1日目午後の歴史資料セッション終了後に対面・オンライン併用で行います。以下、全体のプログラムと歴史資料セッション・大会シンポジウムの趣意文を掲載いたします。会員の皆様には、ふるってご参加いただきますようお願い申し上げます。

参加費については、以下のとおりといたします。

対面参加 : 会員1000円/非会員1500円

オンライン参加 : 会員1000円/非会員1500円

なお、本研究大会の参加申込方法や会費徴収方法、懇親会関係の情報は確定次第お知らせすることになります。ご不便をおかけしますが、この点ご承知おきいただきますようお願い申し上げます。

今年は4年ぶりに懇親会を開催する予定ですので、みなさまのご参加をお待ちしております。

## プログラム

### ◆1日目(7月1日(土))

開会挨拶 8時55分～9時00分

檜山幸夫(東アジア近代史学会会長)

自由論題報告 9時00分～11時50分(1人報告25分・質疑5分)

司会: 鈴木楠緒子(文部科学省)

戦間期の日本外務省における組織改革と国際機構-人事構造と「連盟派」の再検討-

番定賢治(東京大学・アジア歴史資料センター)

戦前期外務省による中国専門外交官の養成計画

-中国在勤外交官をめぐる問題とその是正-

中村凌太郎(立命館大学・院)

新四国借款団交渉における満蒙除外問題の再々検討

-熊本史雄氏と久保田裕次氏の最新成果を踏まえて-

中谷直司 (帝京大学)

司会：久保田裕次 (国士舘大学)

「対支文化事業」をめぐる日中関係

-「日中文化協定」改廃交渉 (1929-1931年) を事例に-

金子聖仁 (東京大学・院)

満洲事変直前の在満日本人社会と満蒙鉄道問題

金子豊 (京都大学・院)

休憩・昼食 11時50分～13時00分

**歴史資料セッション「戦争関連資料の収集・保存・公開-国民の共有すべき歴史的文化遺産をどう残すのか-」**

13時00分～16時35分

司会：東山京子 (中京大学)・島田大輔 (日本学術振興会)

趣旨説明

東山京子 (中京大学)

展示品の向こう側にあるもの-資料を未来につなぐために-

加藤和俊 (名古屋市秀吉清正記念館)

「銃後」の記憶と「もの資料」-民衆と地域を伝える試み-

本康宏史 (金沢星稜大学)

前橋空襲・復興資料館-戦争の記憶を風化させないために-

手島仁 (群馬地域学研究所)

休憩 15時20分～15時35分

討論 15時35分～16時35分

総会 (対面・オンライン併用) 17時00分～17時40分

**◆ 2日目 (7月2日(日))**

**自由論題報告** 9時20分～10時25分 (1人報告25分・質疑5分)

司会：佐々木雄一 (明治学院大学)

東三省の建省改制からみた清末新政期の中央と省との関係

閻立 (大阪経済大学)

辛亥革命以前の孫文における「中国」に対する認識の変遷

呉舒平 (京都大学)

**大会シンポジウム「東アジア近代史における「ロシア」という存在」** 10時30分～16時40分

司会：醍醐龍馬 (小樽商科大学)・櫻井良樹 (麗澤大学)

趣旨説明

醍醐龍馬 (小樽商科大学)

19世紀中葉ロシア帝国対清外交における宣教師の役割

畔柳千明（日本学術振興会）

大韓帝国期の韓露関係

森万佑子（東京女子大学）

休憩・昼食 12時00分～13時00分

中国国民政府の対ソ認識およびその政策決定におけるソ連要因

鹿錫俊（大東文化大学）

北満鉄道譲渡協定(1935)と1930年代ソ連の東アジア戦略

藤本健太郎（北海道大学）

日中戦争以後の日本外交におけるソ連要因 - 冷戦初期までを視野に入れて

武田知己（大東文化大学）

コメンテーター：左近幸村（九州大学）、佐々木雄一（明治学院大学）

全体討論 15時40分～16時40分

閉会挨拶 16時40分～16時50分

檜山幸夫（東アジア近代史学会会長）

## 趣 旨 文

### ◆大会シンポジウム 「東アジア近代史における「ロシア」という存在」

2022年2月に始まったロシアのウクライナ侵攻は、世界に大きな波紋を引き起こし、1年以上が経過した今も、戦場となったウクライナや近接する欧州や中東だけでなく、この東アジアにも大きな影を落としている。

今回の事態は、東アジア国際政治にとって、ロシア帝国/ソビエト連邦の持つ意味を、歴史的に改めて考える必要性をわれわれに突きつけているように思われる。本学会の大会シンポジウムでは、これまでロシア帝国やソビエト連邦の動向について、それほど多く扱ってきたわけではないが、それでも明治維新时期（2018年）、19世紀後半（2012年）、そして第一次世界大戦（2016・2017年）など、時期毎に組んだテーマに即してロシア帝国/ソビエト連邦に関する報告がなされてきた。日清戦争や日露戦争100周年を記念するシンポジウムでも、いくつかの報告がなされた。しかし対象をロシア帝国/ソビエト連邦の動向に絞って通時的に検討してみるということは、これまでなされたことはなかった。また自由論題報告を見ても、ロシア帝国について扱ったものはしばしばあったが、それに比較してソビエト連邦の時期を扱ったものは、きわめて少なかった。

振り返れば、ロシア帝国の東漸にともなって清朝、日本、そして朝鮮との関係性が築かれ、東アジア世界は変貌をはじめた。19世紀以後、西から清朝・大韓帝国・日本にとっては、ロシア帝国の領土、利権の拡大への対処が外交上の課題となり、やがて日露戦争へとつながっていった。日露戦争後の第一次世界大戦期には中国・日本がロシア帝国と連合国の位置にたつなど、変化も見せた。

しかし1917年のロシア革命にともない社会主義政権が成立すると、関係は一変する。日本はシベリア出兵を行い、他方で白系ロシア人が東アジアに移住してきた。ロシア革命後、コミンテルン、ソ連の思想的影響は大きく、東アジア諸国の知識人の多くが社会主義、共

産主義に傾倒した。国際政治上でも日中両国にとって対ソ関係が重要課題となり、満洲事変からアジア・太平洋戦争に至る過程でも、ソ連はさまざまな影響を及ぼした。

そして戦前における関係は、戦後の国共内戦、朝鮮戦争へなにがしかの影響を与えた。後のベトナム戦争、あるいは中ソ同盟から対立へ至る過程などについても同様であろう。

そこで、この共通論題では、そのような影響を与え続けたロシア帝国/ソビエト連邦と東アジア諸国との関係を改めて検討し直すことにより、東アジア近代史におけるロシア帝国/ソビエト連邦の「存在」および、その「影響」のあり方や作用について、深く考えてみたい。

報告はほぼ時代順とし、次のようなものを用意した（実際の順序は前後する可能性がある）。まず畔柳千明氏（日本学術振興会特別研究員）より、19世紀中頃清朝期におけるロシア正教の宣教師の活動と政治・外交関係を報告していただく。今回の報告のなかでは、文化的側面を国際政治に加味したものとなろう。次に森万佑子氏（東京女子大学）より、19世紀末から20世紀初頭の大韓帝国期の韓露関係について、高宗の対ロシア政策という観点からご報告いただく。日本とロシア帝国の朝鮮半島をめぐるせめぎ合いが始まるなかで、高宗が韓国の立ち位置をいかに追求したかという多国間関係におけるロシア要因をみることになろう。以上はロシア帝国時代のロシアの東漸の文脈で理解されてきたテーマである。

以下の三報告はソビエト連邦に変わった時期を扱ったもので、それぞれ社会主義国家となった後も国際政治上の力ある存在としての「ロシア」と日中両国関係を扱う。鹿錫俊氏（大東文化大学）には、中ソ関係史、特に中ソ両国における社会主義政治勢力の動向もふまえて、中国国民政府の対ソ認識およびその政策決定におけるソ連要因についてお話しをいただく。藤本健太郎氏（北海道大学）には、ロシア史の観点から、1930年代のソビエト連邦の東アジア戦略を日本の満洲政策と関連づけて、ご報告をいただく。そして武田知己氏（大東文化大学）には、日本側からの視点に立って、日中戦争以後の日本外交におけるソ連要因について、戦後の冷戦初期までを視野に入れた報告をお願いしている。なお武田氏は、現在の「ウクライナ戦争」の最前線に近いワルシャワからの現地参加となる。

そしてコメンテーターにはふたりをお願いした。ひとり左近幸村氏（九州大学）で、ロシア史、特に経済史の観点からロシア帝国/ソビエト連邦と東アジアとの関係を踏まえて、コメントしていただく。もうひとりの佐々木雄一氏（明治学院大学）には、日本外交史の観点から、今回とりあげることでできなかった明治後半から大正期の日露関係を中心にコメントいただけることと思う。

#### ◆歴史資料セッション「戦争関連資料の収集・保存・公開-国民の共有すべき歴史的文化遺産をどう残すのか-」

歴史資料セッションは、2020年から22年にかけて「歴史資料としての近代宗教関係文書―保存と活用の実現に向けて―」、「保存公開資料と歴史研究者の役割」、「私蔵資料と歴史研究―「発見」から保存・活用へ」をテーマとして特集を組んできました。ここで扱ってきた歴史資料は、「文字」として残されてきた「記録」に中心が置かれてきましたが、今年度は「もの」と証言を題材にして資料の収集・保存・公開について歴史家の視点から考えていきます。

戦争は時代を超えて一般人に多くの惨禍を齎すことは言うまでもありませんが、ことに科学技術の発達した 20 世紀以降の戦争では、致命的で大量の破壊を戦地のみならず、いわゆる「銃後」の社会に及ぼします。破壊は物理的側面のみならず、人間の精神的側面にも及び、長く人々に影響を及ぼすと言われていました。こうした戦争と人間の実態として捉えるための方法としてオーラルヒストリーが広く利用されていますが、さらに博物館による「もの」から戦争を考える提起がなされています。

2023 年度は、「戦争関連資料の収集・保存・公開－国民の共有すべき歴史的文化遺産をどう残すのか－」というテーマを設定し、地域資料のなかでも個人が持つ戦争関連資料（もの史料）をどう残していくのかということを考えていきます。

本年度の企画は、次の、(1)「収集保存公開」、(2)「地域における資料の保存管理」、(3)「資料館建設」という三つの視点からの報告で構成されます。

第一は、博物館における戦争関連資料の収集方法、保存管理および一般公開をいかに行っているかという点です。名古屋市博物館では、名古屋空襲の記録や戦時中の資料等、市民からの寄贈史料を収集保存管理し、公開しています。同館学芸員加藤和俊氏（現名古屋市秀吉清正記念館学芸員）は、2023 年 1 月 21 日から 3 月 5 日まで開催された「戦前を生きる～収蔵品が伝えるココロ～」を企画しました。この展示を題材として、地域における戦争関連の記録資料を後世に伝えていくために、個人の記録資料のどういった点に注目し、公開したのか、さらには、博物館が市民からの寄贈を受けた段階において、学芸員が寄贈資料の選別・取捨選択をしなければならないという点を含めて、資料の収集公開における現状と今後の課題についてご報告いただきます。

第二は、地域に根ざした資料をいかに保存していくのかという点です。金沢星稜大学特任教授本康宏史氏は、かつて石川県立歴史博物館において、戦後 50 年の 1995 年 7 月 29 日から 8 月 27 日にかけて、特別展「銃後の人々－祈りと暮らし－」を企画開催しました。この企画展示を中心に、石川県の戦争資料の収集保存管理および公開について、さらに、近年石川県内において、個人収集の戦争資料・資料館の保存問題が議論の対象となっていることから、個人資料の保存に関する現状と課題についてご報告いただきます。

第三は、民間から集められた「もの資料」を適切に保存する公的資料館をいかに創設するのか、実際にどのようなやりとりが地域でなされているのかという点です。前橋市では、「前橋空襲を風化させない」という市民や団体の声を受けて、公的資料館としての前橋空襲・復興資料館の設立を進めています。この資料館設立の契機となったのは、前橋空襲体験者が自らの力で戦争を語り継ぐ「あたご歴史資料館」が、語り部の高齢化により令和 2 年 3 月末で閉館し、「戦争は体験者が語るというあり方から新たな方法」が求められたことにあります。「前橋空襲と復興資料館検討委員会」の委員長を務められている手島仁氏（群馬地域学研究所代表理事）に、前橋空襲・復興資料館の設立に至るまでの経緯についてご報告いただきます。

---

## 会 告（会費納入・会員資格）

### ◆会費納入について

会費納入のお知らせと振込用紙（ゆうちょ銀行）の送付は、今年度も会誌『東アジア近代

史』の送付時に同封させていただくことになりました。ご理解のほどよろしくお願ひ申し上げます。

#### ◆会員資格について

常任理事会において、3月末日をもって会費3年度分未納者の退会承認を行いましたことをご報告申し上げます。

---

### 新規入会者（2022年9月～2023年4月）

高小超（明治学院大学・院）、閻正昊（広島大学・院）、陳春松（京都大学・院）、金子聖仁（東京大学・院）、呉舒平（京都大学）、番定賢治（アジア歴史資料センター）、野口英佑（神戸大学・院）、光多隆之介（神奈川大学・院）、王昊天（京都外国語大学・院）、兔内勇津流（北海道大学スラブ・ユーラシア研究所）、白木澤涼子（北海道大学経済学院 北海道地域経済経営ネットワーク研究センター）

〈順不同・敬称略〉

---

### 受贈図書（2022年10月～2023年4月）

『竹島資料勉強会報告書「明治10年太政官指令」の検証』（公益財団法人日本国際問題研究所、2022年3月）、檜山幸夫『日清戦争の研究 中巻』（ゆまに書房、2022年9月）、蔣允杰『帝国日本と朝鮮牛——畜産資源の確保と植民地化』（晃洋書房、2023年1月）、渡邊公太『石井菊次郎——戦争の時代を駆け抜けた外交官の生涯』（吉田書店、2023年1月）、萩原充『近代中国の石油産業——自給への道』（日本経済評論社、2023年1月）、檜山幸夫『日清戦争の研究 下巻』（ゆまに書房、2023年2月）、松本俊郎編『「満洲国」以後——中国工業化の源流を考える』（名古屋大学出版会、2023年2月）

〈受贈順〉

---

### 会誌『東アジア近代史』論文投稿の募集

会誌『東アジア近代史』第28号（2024年6月刊行予定）に掲載する独立論文を募集いたします。ふるってご投稿ください。なお、投稿締切は2023年10月末日、投稿先および問い合わせ先は本会事務局（下記奥付参照）となっております。

#### 東アジア近代史学会会報 第54号

2023年5月10日発行

発行 東アジア近代史学会 会長 檜山 幸夫

編集 東アジア近代史学会会報編集委員会 委員長 鈴木 哲造

東アジア近代史学会事務局 事務局長 高江洲 昌哉

〒180-8629 東京都武蔵野市境5-8 亜細亜大学国際関係学部青山研究室内

E-mail modern\_east\_asia\_jm@hotmail.co.jp ホームページ <http://www.jameah.gr.jp/>